

『誘惑フェロモン系ダーリン』

著：切江真琴

ill：林 マキ

「顔はかっていいのに童貞なの、その鼻のせいなんだ？」

「……へ。……っえ？」

童貞卒業したいという叫びはやはりばっちり聞かれていた。羞恥で竦んだその耳元に、「男でもいいなら——」と、かぐわしい吐息が囁いてくる。

「俺と、セックスする？」

「え……」

同時に、有賀の指を使い、高瀬は五階のボタンを押した。なにかとても危険なスイッチを自ら入ってしまったかのように感じて、背すじが震える。

「どうする？ 俺の匂いがイヤじゃないなら……してみない？」

低く、掠れた声。囁きながら、有賀の指を絡め取る大きな手が、ぐっと力を込めて強く握ってくる。

どうしてか、高瀬がとても緊張し譲歩しているかのように有賀には思えてしまった。すべてが問いかかけの形になっているからかもしれない。小さく息を飲み込むと、少し落ち着いた。

するか、しないか。問いかけに対する答えはふたつにひとつ。ならば「しない」に決まっている、けれど。

返事するために吸った空気は、高瀬の匂いに染まっていた。

「——お前の、匂い……は……すげえいい……」

つい、うっとりとしてしまった。その気がないのならまずは、ゲイではない、男とセックスするつもりはないと、そう告げなくてはいけないのに。

「へえ……あんた、俺の匂いが変だとか、思わないの」

探るように重ねて問われるが、変なのは、匂いだけでこんなにも発情している自分の方だ。

「べつに、全然、変なんかじゃない……」

有賀の言葉に返事はなく、ふっと、笑いを含むような溜息だけが聞こえた。

そのときちょうど、エレベーターの扉が開いた。外気が密室の中の空気を薄め、おかげで少し正気が戻る。とにかく、高瀬から離れ部屋へ戻るのが賢明だ。

しかし足を踏み出すよりも早く、有賀の身体は強く引かれエレベーターの壁に背中を押し付けられた。

声にならない声を喉奥に置いた有賀の頭の脇に手を突いて、十五センチは背の高い男が正面から顔を覗き込んでくる。

近すぎて戸惑い、思わず目を閉じた瞬間、唇に何か触れた。

キス、されている。驚きと、口がふさがれたことで息が止まる。だが普段は鼻で呼吸しているのだと

思い出し、小さく吸って――甘い香気に脳天を直撃された。

思わず呻いた有賀の中に、そっと舌が忍び入ってくる。

「っ……」

舌先が唇の内側をなぞってゆく。ぞわ、と得体の知れない痺れが背すじに響いて、息は浅く、痙攣するような速さになる。そのせいで身体の内側は高瀬の匂いでいっぱいになってしまう。

甘い、甘い匂い。膝が崩れ落ちそうになって思わず高瀬のスーツを掴むと、強く腰を引き寄せられしゃがみ込むのは免れた。

「んん、ん……っ」

合わさる唇の角度は変えられて、うんと深くまで舌で探られる。背が仰け反って苦しくて、口が勝手に開く。そんな有賀に覆いかぶさるように、高瀬は捕食するようなくちづけをした。

キスが、こんなに気持ちいいものだななんて思いもしなかった。

初めて知る快感が空恐ろしく、身をよじると、密着した下半身が昂ぶっているのに気がついた。自分が、のっぴきならない状態で発情していると悟り、いっそう顔も身体も熱くなる。

「……とろとろだね」

唇をわずかに離し、鼻先を触れ合わせ、高瀬が満足げに囁いた。けれど頭の芯がぼうっとして声を出すこともできない。とろけきった身体は感覚の奴隷のように高瀬にしがみつくだけだ。

腰を抱かれ胸に抱きとめられながら、ようやくエレベーターを降りた。廊下に出て数歩、有賀の部屋よりもエレベーターにひとつ近いドアを高瀬は開ける。

本当に、隣人なのだ。

ぼんやりした頭でそう理解したのも束の間、有賀はドアの内側に引き込まれた。部屋の中は、やはり甘い香りで満ちている。

靴を脱いだかも定かでないうちに、引きずられるようにして数歩を歩くとベッドへと辿り着いた。膝裏にマットレスの縁が当たり、そのままぽすんと座り込んでしまう。見上げると、ベッドに片膝を乗せた高瀬が自分を見下ろしていた。

明かりがついているのは寢室の隣の部屋だけなのか。明かりを背後にした高瀬の顔は薄暗く、けれどその眼差しがぎらぎらとした欲を持って強く自分を見つめていることだけはわかる。

「……こんなとこ連れ込まれちゃって、有賀さんわかってんの？」

囁きながら高瀬の手が有賀の頬を撫で、耳元の髪をかき上げた。鼻先をかすめたスーツの袖口からふわりと甘い空気が溢れ、また陶然とする。

「なんにもわかってないんだろ」

言いながら有賀の頭の丸みをやわらかく撫でてうなじの髪をきゅっと引く。

わかっていないのは高瀬の方だ。動くたびに香りで色づいた空気が有賀を惑わすのに、それをわかっていない。

すう、と息を吸うと、馥郁とした香りが胸を満たした。頭の芯がくらくらする。それでももっとその甘さを堪能したくて、高瀬のスーツの襟を掴み首を伸ばした。顎の輪郭に鼻先を触れさせるとうっとりするような匂いはより濃くなった。

――……すごい。すごく、いい匂い。

こんなふうに、いくらかいてもただひたすら好ましいだけの匂いなんてそうはない。

「なあ……なに、されんの、俺……」

呟いた自分の声が低く甘く掠れている。囁く高瀬と似たトーン。これは多分、睦言のトーンなのだ。小さく、唸るような吐息を飲み込んで、高瀬が覆いかぶさってきた。

「っん……！」

ベッドの上、のしかかられていきなり深くちづけをされる。とろりと自分の芯が一瞬でとろけるのがわかった。

キスは、気持ちいい。もっと、もっと濡れる場所を愛撫して欲しくて背中に腕を回すと、唇と舌で口の中をたっぷり蹂躪された。

抱き締めてくる高瀬の手のひらが、身体の輪郭を確かめでもするかのようにまさぐってくる。服越しにそうされるだけで、痺れるような疼きで有賀の身体は勝手に媚びるようになっていく。

体温であたたまった空気に高瀬の匂いが溢れている。くちづけをそっとほどき、高瀬が自分を見つめてくる。

「有賀さん、俺以外のやつにこうやってついていたら駄目だよ。気持ちいいことは俺がたくさんしてあげるから……だから、俺にしときな」

ぐいぐい押してくる男の、乞うような声にどきりとした。

「他のやつとか、ない……俺は、お前の匂いが——……エロすぎるから」

だから、ついてきたのはお前のせいだ。

そう、高瀬の匂いを悪者にして、有賀はその凶悪な甘さを全身から垂れ流す男にしがみつき、首筋に鼻先を埋めた。

「っ……………！」

比喩でなく身体が震えた。

息を吸い込んだ胸の内側がじんじん疼く。匂いを吐き出してしまふのが惜しくてただひたすら小刻みに肺を震わせ鼻を鳴らす。とにかくなんでもいいからこの匂いに溺れていきたい。仕方なくなる。

「俺の匂いに弱いなんて——あんたほんと、かわいすぎだろ……」

高瀬が有賀の首を掴みキスを再開した。

もっと、胸の底まですべて高瀬のフェロモンに浸されたいのに、くちづけはぬめって甘く、匂いとは別のベクトルで有賀を陥落させてゆく。

は、は、と小さく吐息が揺れている。まさぐられる身体からスーツの上着がはだけられ脱がされる。ネクタイなんていつ抜かれたかわからないうちになくなっていた。

ワイシャツの薄い生地は高瀬の体温をダイレクトに伝えてくる。あたたかく、どこかしつとりと湿気を含んでいるかのような重い甘い空気にのしかかられている。

自分も、脱がせたい。高瀬の体温を感じたい。

「なあ、お前も……脱げよ」

スーツの肩に手を這わせて掠れた声でねだった。黒い瞳にぎんと強く光が浮かぶ。眼差しの強さにまでくらくらする有賀の上で、高瀬は身を起こすと、するりと上着を脱ぎ落とした。ネクタイに手をかけ、しゅっと音をさせて抜き取る。

この男の所作はなんでいちいちかっこよく見えるのだろう。匂いに惑わされているだけにしては有賀の胸は走りっぱなしだ。

「こっから先は、あんたが脱がせて？」

低くねだる声をして、四つん這いの高瀬が囁いた。有賀はごくりと息を呑む。自分を見下ろす男の髪が、少し乱れているのがひどくエロチックなのだ。

おずおずと手を伸ばし、ボタンに手をかけた。

みつつまでを外したところで、空気が抗えないような甘さを湛える。ずっと燻っていた腰の奥の熱がぐんと欲を増して性器を昂ぶらせてしまう。

指先にうまく力が入らなくて止まってしまった有賀の手に、高瀬の大きな手のひらが添えられた。

「ひとつ言っとくけど。……俺はゲイだから、これ以上脱がせるなら——最後までするよ」

セックスする、ということか。力の入らない指先がさらに痺れたように疼いて震える。

「……すればいいだろ」

したいと素直に告げるのが恥ずかしくてつんとした物言いになった。けれど何度かのやり取りでそんな有賀を理解したのか、高瀬はくっと口角を上げる。

「じゃあ、脱がせて」

あくまで身体は離れたまま、顔だけをそっと有賀の耳に寄せて誘惑した。

ゆっくりと、白い光沢のあるボタンをボタンホールにくぐらせるたびに甘い空気が覆いかぶさってくる。焦らされた欲がどんどん高められていくようだ。

やがて、すべて開放したワイシャツの前身ごろがふわりと垂れ、厚みのある胸とほのかなあたたかさを帯びた香りが有賀を全力で誘惑しにかかってきた。

「すごい、いい匂いだ……」

とろけた声で呟いて脱がせた高瀬の素肌にしがみついた。シトラスの爽やかさに隠されていた甘い体臭がうんと強くなる。

「っ……くそ」

有賀をからかう言葉を何も発さず、息を押し殺すように呻いて高瀬が再び覆いかぶさってきた。

のしかかられた身体に圧され、昂ぶりがスラックスの中でぐり、とよれる。重なる高瀬のそこにも同じ硬さを微かに感じ、胸からざわざわとしたものが身体中に這い出てゆく。

「……、は、う……」

たまらなくてその素肌に鼻先をこすりつけると、じん、と鼻奥が痺れるほどに感じた。

匂いと食欲は直結していないはずなのに、我慢できず有賀は高瀬の首に噛みついた。

弾力のある肌が心地よくて何度もあぐあぐと歯を立てる。高瀬は首筋もうなじも肩も、すべてが心地いい香りで満ちている。脇の下まで鼻を突っ込んでもまだ甘くいい匂いしかしなくて、こいつは本当に身体自体が芳香を蓄えているのだと感動した。

ひたすらくんと鼻を鳴らし、匂いをかぐ。かいで、噛む。

とうとう我慢できないといったように高瀬が肩を震わせた。顔を上げると、有賀の頭を撫で愉しげに笑っていた。

「な、んだよ」

「有賀さん、かわいいな」

「へ」

「初めてのくせに、えろくてかわいい」

くすくす笑いながら、高瀬は片手で有賀の腹を滑るように撫で下ろし、そのさりげなさのままやんわりと股間を包み込んだ。

「ちょっ……！」

「匂いで勃ったの？」

「っえ……あっ」

答えるより早くストラックスの上から形をなぞられ、びくんと腰が跳ねる。

「俺にも有賀さんの匂いかがせてよ」

「ま、待て……っ」

「俺ばっかかがれてずるいじゃん」

有賀の上で浮かせていた身体の重みをのっしりとかけて、高瀬は顔を首筋に埋めた。胸も腹も足も密着してしまい他人の体温の熱さに驚くが、さらりと頬に落ちてきた高瀬の髪の毛の匂いに恍惚としたらもう負けだ。

重なり合った身体の足のあたりに、硬く卑猥な熱を持ったものが当たっている。やっぱり高瀬も勃っている、と実感したとたん背すじが震えた。

「っん、んー……っ」

高瀬の指先が、勃起した性器の側面を挟み込んで、なぞり上げてはゆったりと揉む。喉奥で小さく息を殺しても、なんだかいやらしい色は漏れてしまう。

やわやわとストラックスの上から昂ぶりを揉みしだかれながら、いつのまにかワイシャツをはだけられていた。

「んっ……」

かぶ、と首を噛まれる。痛みを感じるほどではなくて、そのせいで腹の中に疼くような何かが響く。やめて欲しいわけではないけれどやるせなくて、胸元へ滑り落ちてゆく高瀬の髪に指を通し引いた。真っ黒なのにくにやりとした猫っ毛が、指の股をすり抜ける感触にどきりとする。

不意に胸の先に熱く柔らかいものが触れ、有賀は驚いて首を起こした。

「な、なんでそんなとこ舐める……っ」

男の乳首に弄る価値などないと思う。なのに有賀の焦りぶりがおかしいのか高瀬は笑う。

「だって、舐めて欲しそうだったから」

「う……うそ」

「ほんと」

言いざま、指の腹が小さな粒のような乳首を押しつぶした。さらに円を描くようにくりくりされ、鋭い快感が腰の奥に響き跳ねそうになる。

「っや、……それっ、やめ」

「んん？ こんな、ツンツン尖ってたらさ……」

高瀬の指が色づいた部分全体をつまみ上げた。言葉通りにつんと勃った乳首が指先から覗いている。

「舐めて、って言ってるようなもんだろ？」

「っあ……！ あ、っあ、や……！」

根元をくりくり揉みながら、高瀬はその先端を舐めた。

びく、と勝手に首が仰け反る。

手の中の高瀬の髪を引っ張りやめさせようとするのに力が入らない。ちろちろと意地悪く、尖らせた舌先で胸の先をはじかれるたびに腰の付け根までぴりぴりした痺れが走る。

下着の中で性器の先端も濡れてゆく。布とこすれ、ぬるりとして、気持ち悪いのになぜか感じて、息が勝手に喘いでしまう。

いつのまにか上手にボトムの前は寛げられていた。幾度も掬い上げるように乳首を舌先で舐られて腰が浮く。それに合わせ、するりとストラックスを脱がされる。

はぁはぁと息が上がりきってとろけた有賀の腹の上を、高瀬の唇が伝い降りてゆくを感じる。もう弄られていないのに乳首がじんじんするのを不思議に思いながら、首をもたげたところで——上目でこちらを見つめる高瀬と目が合った。

なにを、されるのだろう。

ゆっくりとした動作は、すでに獲物を捕まえた大型の肉食獣を思わせる。

有賀の視界の中で高瀬は下着のウエスト部分に両手をかけて、そっと腹からそのゴム部分を浮かせた。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>